

理系出身で編集者に

浅井 歩



私はいま、自然科学書の出版社「化学同人」の編集部で、おもに大学向けの教科書や参考書の編集を担当しています。神戸大学理学部生物学科、大阪大学大学院理学研究科生物学専攻を経て、24歳の時に化学同人に入社しました(早6年!)。今回は、理系出版社に入社したきっかけと、実際の仕事の内容についてご紹介します。

出版業界を意識したのは

大学院入試を終え、修士の研究室を決めたころから、「科学を伝える・発信する」仕事に興味を持ち始めました。研究室での実験や研究をしているなかで、「ピペットを握っているときより、セミナーで論文を紹介したり本を読むほうが好きかも」と思い始めたからでした。

また、大学院の研究室は「JT生命誌研究館」という、生命科学の研究と展示を行う施設の中にありました。そこでは定期的に研究室の一般公開があり、一般の方に研究の説明をします。そのような環境で研究をし、また「説明がわかりやすいね」と評価を頂いたりするうちに、真剣に「科学を伝える」仕事を目指すようになりました。

「科学を伝える」仕事として思いついたのは、博物館などの学芸員、大学や研究室の広報、自然科学書の出版社、検定教科書の出版社、新聞社の科学部などでした。仕事の内容を調べると、自然科学書の出版社の仕事が面白そうだと感じました。しかし、そのような出版社の公募は不定期。書店に行っては出版社をメモし、その出版社のHPを定期的にチェックする、という就職活動をしました。化学同人が新入社員を募集したのは実に4年ぶりだったので、それを見つけ、無事に入社できたことは、本当にラッキーなことでした。

理工系出版社はどんなところか

化学同人も含め、理工系の専門書を出す出版社は、雑誌や大学生向けの教科書、科学読み物などの書籍を作り、それを書店や生協で販売することによって出版業を営んでいます。

化学同人では、先輩や上司のアドバイスを受けながら、企画・原稿の依頼・原稿を頂く・編集作業(内容の吟味から誤字などの修正、図を作成したり)・カバーなどのデザイン・印刷会社とのやり取りまで、本1冊に関わるほぼすべてのことを1人の担当が行います。責任も感じますし、辛いことも多いですが、やり甲斐があるのも確

かです。ときには遅くまで残業をしたり、通勤途中に原稿を読み直したりすることもあります。

また、よく驚かれるのが、テレビでよく見る週刊誌などの編集部と違って、事務所がとても静かなこと。みな黙々と原稿に向き合っています。

日常の仕事の80%がデスクワークになります。デスクでは、PC上での作業(原稿データの修正や作成、メール)と、紙面での作業(赤ペンで校正)が半々くらいでしょうか。しかし、大学で著者の先生と打合せをしたり、原稿を受取りに行く仕事も、著者の先生との信頼関係を築くためにとても重要です。遠方の大学に出張することも月に1~2回はあります。

OB訪問では学生さんに「体力はありますか?」とよく訊かれます。腕力や脚力はあまり必要ではありませんが、ここぞという時に集中して仕事をしないといけないので基礎体力は必要です。風邪を引いたりすると集中力が落ちるので、健康管理をキチンとできる力は大事だと思います。

専門の知識などを活かせるか

専門の知識を「活かす」ことはできますが、「理系出身でなければいけない」ということもありません。化学同人には文系出身の編集者も多くいます。文系であっても、文章の意味が通っているか確認したり、わかりやすいかどうか判断して、十分に編集ができるからです。文系の先輩が、思ってもみないような新鮮な切り口で書籍を企画されることもあります。

最近では理系出身の書籍編集者も増えてきたようです。理系出身だと、たとえ専門が少し違ってても理系的なロジックで著者(そのほとんどが大学の先生)と話すことができますし、講義の雰囲気などもよく分かっているのでスムーズに打ち合わせを進められる場面があります。しかし書籍は、あくまで初学者・非専門家の方に向けたもの。常に「非専門家の目線(自分が学生だったときのこと)」を忘れないように心がけています。

入社する時に編集長が言っていた、「この仕事は95%しんどくて辛くて、嬉しいのは5%くらいやぞ」の言葉は、本当にその通りだなと感じています。「できたー!」というひとときの喜びに向かって、緻密な作業を積み重ねていく毎日です。